令和６年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業

令和6年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本柔道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕が、6月14日から16日までの3日間、講道館（東京都文京区）において実施された。

研究者14名が出席し、第15回全国中学校（教科）柔道指導者研修会（10月18日～20日開催）に向けて、指導内容の研究・検討が行われた。

■1 日目（6 月 14 日）

開講式では、髙山健全日本柔道連盟常務理事・事務局長と端春彦日本武道館振興課長が、それぞれ主催者挨拶を述べた。

今回は研究者４名が新たに加わり、前瀧大吾研究者の司会進行のもと、これまで検討してきた指導法を踏まえて、生徒が能動的に取り組めるよう「楽しさ」を伝える方法を主眼に検討が行われた。

小山勝弘研究者からは、「ある程度の体系ができあがり、特性を活かして素晴らしさを伝える、前のめりに取り組める方法に特化したものに挑戦してはどうかと考えた。それは授業が良くなることだけでなく、その先にある健康保持増進という目的に届くことを見据えた新しいステージである」ことが説明された。

研究者からは「子供たちが体育の授業でどのような楽しさを求めるのかを押さえたうえで展開することが大事ではないか」（與儀幸朝研究者）、「これまでの指導法の常識にとらわれず、良い案を出してほしい。体育なので計画的・意図的ということも大切になる」（木村昌彦研究者）などの意見が挙がった。

その後、受身・投げ技・固め技の３グループに分かれて、これまでの指導法や研究者が実際に行っている指導法について話し合いが行われた。

◇受身……前瀧大吾研究者、和泉大樹研究者、久保田浩史研究者（助言者）
◇投げ技……山根友樹研究者、石村大祐研究者、神谷兼正研究者（助言者）
◇固め技……近藤哲也研究者、坪根一美研究者、與儀研究者（助言者）

■2 日目（6 月 15 日）

午前中は、受身・投げ技・固め技ごとに、前日のグループ討議で話し合った指導法を実際に行いながら全員で振り返り、質疑応答や意見交換が活発に行われた。

続いて、髙橋健司研究者から「基本的な指導」として、資料をもとに、柔道指導にあたっての基本的な事柄の説明が行われた。また、向井幹博研究者が礼法の指導法を、ポイントを説明しながら行った。

（上）指導法について意見を交わす研究者
（左下）投げ技グループが発表したゲームの様子
（右下）固め技グループが発表したゲームの様子

午後はまず各グループに分かれて、午前中の質疑応答・意見を踏まえて、どのようにしたらそこに更なる「楽しさ」「喜び」の要素を加えられるか、方法・授業展開についてグループディスカッションを行った後、話し合った内容を実践して発表した。

【受け身】体つくり運動の要素を持たせた「じゃんけん肩タッチ」から始まり、そこに転がる動き・受け身を段階的に加えて発展していく方法を披露した。

【投げ技】相手を動かす・崩すことを中心とした検討を行ったことの発表があった。例として、3 人グループになり、組んだ２人のうち１人が、鬼役の１人に相手の帯を触らせないよう相手を動かして逃げるゲームが披露された。

【固め技】生徒が主体となり自分たちで考え、教員は補う役割になる指導法として、4 人組で伝達・メモ・動作を協力して固め技の形を作り上げるゲームが発表された。

それぞれの発表の後には、他の研究者からの感想、意見、質問などがあり、それらを踏まえて 3 日目の指導計画策定を行うこととなった。

■3 日目（6 月 16 日）

前日の発表をもとに、各グループで 10 月の指導者研修会での指導内容を話し合いながらまとめていき、それをもとに３日間の研修の日程を作成した。

閉講式では木村昌彦研究者が「色々な忌憚ない意見が出たのは進歩した部分だと感じる。教育環境が変わってきている中で、武道はこうあるべきという重要な部分も、妥協でなく適応という形で変わっていけると良いのではないだろうか。指導者研修会も、参加者が楽しい、自分にもできると思ってもらえるようなものにしたい」と講評を述べ、全日程を終了した。